

釜無川の東西を結ぶ歴史

信玄橋と高砂渡し

南アルプス市^{かみたかすな}上高砂と甲斐市竜王を結ぶ信玄橋。平日の朝ともなれば多くの通勤車両で、渋滞が起こります。信玄橋が架かる前、少なくとも江戸時代から昭和初期には竜王に渡るのに、おもに渡し舟が利用されてきました。その渡船を「高砂渡し」と呼んでいました。江戸時代、最初は竜王村が船元^{かふもと}となっていました。文化7年(1810)の甲府代官所への嘆願以後、上・下高砂へ移りました。高砂渡しの運営方法や運行期間、運賃は時代の流れとともに変化していきま



昭和7年信玄橋開通記念

す。今でも残る文書や伝承から、明治時代の渡し場の風景を想像しました。



大正10年頃の高砂渡しと仮橋(斎藤毅一氏蔵)

す。今でも残る文書や伝承から、明治時代の渡し場の風景を想像しました。

新緑がまぶしい季節、上高砂の船着場で腰掛けながら船を待っていると、対岸からゆつくりと船が近づいてきます。どうやら船頭さんが1人と、それを手伝う船夫さんが2人の合計3人で漕いでいるようです。船は底が平らな高瀬舟^{たかせぶね}で、長さは12.4m、横2.7m、高さは45cmぐらいでしょうか。隣の客の話では、なんでも船頭さんは代々、河内の富士川沿いの村々から探してくるらしく、今の船頭さんも身延下山^{しんげやま}の人だそうです。雇われた人の中には上高砂で嫁を見つけ、婿入りする人も多かったとか。

渡し船は4月1日から11月まで運行し、釜無川の水が少なくなる冬場は、仮設の木橋を渡るそうです。待っている人の中には川東^{かわひがし}の住人もいます。普段、渡し船を利用するのは川西^{かわにし}だけで旧35カ村、川東でも旧8カ村の人々で、遠くは武田や樋口(現斐崎市)から来たとの声も聞こえます。運賃は2人5厘、牛馬を連れて行く場合は10厘。中には渡しを使わずに、荷物を頭の上に載せ、歩いて釜無川を渡る人の姿も見えます。

さて、どうやら船が着いたようですね。昭和7年(1932)11月15日、コンクリート製の信玄橋が完成すると、高砂渡しはその役割を終えました。最初に作られた信玄橋は長さ455.5m、幅員6.36m、橋脚32基で、作業員延18300人、総工費11万8000円の大工事でした。建築当初は親柱^{おやばしら}頭部に橋灯^{きょうとう}が灯り、夜間に通行する

人々をあたたく照らし出しました。しかし、橋灯は戦時中に供出されてしまいました。旧信玄橋も老朽化と社会の発展に伴い、平成4年(1992)、現在の信玄橋の完成とともにその役目を終えました。

高砂渡しから旧信玄橋へ、旧信玄橋から現在の信玄橋へと川を渡る形は変わりましたが、釜無川は今も変わらず、往来する人々のさまざまな思いを水面^{みなも}に映しています。



旧信玄橋 親柱上に橋灯が見える